

残暑厳しき中、先月末より本県も「新型コロナ蔓延防止措置」が発令され、東京オリンピック、甲子園、そしてパラリンピックと自宅 TV に釘付けされる毎日が続きますが、宮崎県防衛協会青年部会 宮崎支部会員の皆様には、恙なくお過ごしのことと大慶に存じます。

日本五輪選手団大活躍の興奮も冷めやらぬ先月末、在アフガン米軍全面撤退を受けタリバンが瞬く間にアフガン全土を掌握し、カブール空港の混乱は 46 年前南ベトナムの首都サイゴン陥落で、米大使館から慌ただしく飛び立つヘリや、ポートピープルの映像を彷彿とさせられました。

当時私は東京都心の市ヶ谷 32 連隊に所属する 21 才の若き陸上自衛官で、南ベトナム亡国の惨状を目の当たりにして、改めて国防の重要性や職責の重大さを再認識した思いがあります。

その当時の自衛隊は「専守防衛」を金科玉条のように奉り、親善訪問でも無い限り陸海空自衛隊が他国に足を踏み入れることなど全く想定外でしたから、今回アフガン在住邦人救出の為、空自の C-2 及び C-130 計 3 機がカブール空港へ飛ぶとの報道に欣喜雀躍したところです。

空自パイロット等は当然ですが、陸自習志野の特殊作戦群でも海外在住邦人救出を想定した訓練等を実施し報道公開していましたので、隊員達は忸怩たる思いだろうと推察しています。

今月もまたこの件に関して小川先生からタイムリーな、そしてかなりインサイドな「メルマガ」がリリースされましたので、以下に転載させていただきます。是非ともご一読下さい。

## ・アラブの春を教訓にしていない日本政府

---

せっかくアフガニスタンに自衛隊機を 3 機も投入したのに、そのまわりを固めていなかった結果、思ったような成果が上がっていないのは残念な限りです。

政府が C-2(1 機)と C-130(2 機)の自衛隊輸送機を出発させたのは、15 日にアフガンの政権が崩壊した 8 日後の 23 日になってからでした。自衛隊機は命令が出れば即応できる態勢にあるのですが、**政府の決心が遅れに遅れた**からです。その結果、26 日に旧アフガン政府関係者 14 人、27 日に日本人女性 1 人を隣国パキスタンに出国させるにとどまっています。

政府の決心の遅れとともに、**カブール空港までの移動**について手を打っていなかった問題は大きいと思います。明らかに**日本政府の失態**です。

今回は出国希望者がカブール空港に詰めかけて身動きできない状態だったところに爆弾テロが発生し、日本人女性が空港まで自力で移動できたのが奇跡と思われるような状況でした。これではいかに**自衛隊が迅速に現地入りしようとも**、そして、自衛隊の誘導部隊が空港の外で活動できるように法改正が行われたとしても、どうしようもありません。

日本と対照的だったのは**韓国**です。25日の段階で**国民と関係者 390 人全員**を出国させるのに成功しています。

韓国政府はアフガンの**政権崩壊直後に輸送機と特殊部隊**を現地に向かわせると同時に、現地の大使館員が米軍と交渉して**米軍が押さえていたバス 6 台**に 350 人あまりを乗せて空港まで運びました。米軍のバスはタリバンとの合意で空港との間を移動できることになっており、韓国側は**米軍人をバスに同乗させてタリバンの検問所を通過した**のです。

これが可能になったのは、**韓国大使館**が自国民と関係者の**現状を把握し、連絡網の構築と避難訓練**を怠らず、集合場所なども明確になっていた結果です。ほとんど把握していなかった日本大使館とは雲泥の差があります。

日本の危機管理を見ると、現地駐在の社員と家族ばかりでなく、**現地従業員の現況**を把握することが形式に流れている例に事欠きません。

きちんと把握している状態とは、**連絡**を取るべき**全員**に通知を発信した場合、**1 時間以内にアンサーバック**がある状態で、それを義務づけることから始めなければなりません。**避難・脱出**の訓練も、ルートと手段について幾通りもの**代替案**を準備し、繰り返し**実動訓練**を重ねておかなければなりません。

2011年3月、アラブの春に揺れるリビアから中国政府は自国民4万2600人を10日間で安全地帯に脱出させました。空路や海路だけでなく、大部分の中国人は使える陸上交通手段によって国境を越えることを最優先させたのです。韓国も1400人が脱出しました。このとき日本政府は23人の在留邦人を脱出させられませんでした。同じことを繰り返す日本。コロナ対策も大丈夫なのか心配になります。

(小川和久)

私が自衛隊で覚えた四文字熟語で印象に残っているのは「有事即応」です。当初「有事」の意味不明で、それが「戦時」と理解したのは暫く時間が経過してからだったような気がします。現在倅達が「戦闘服」と呼ぶ同じ被服を、何せ我々の頃は「作業服」と呼称させられていましたから。

漸く若者達にもワクチン接種が行き渡り、我々も「With Corona」でしぶとく生き残りましょう。

令和3年9月1日

宮崎県防衛協会 青年部会 宮崎支部長 小倉和彦